きぼうのいえ施設長 山本雅基さん

山谷のドヤ街にホスピスを建てた若者の志

取材・文◉中山あゆみ

「ホームレスのためにホスピスを建てたい」。預貯金ゼロ、無職の30代の若者が一念発起して鉄骨4階建ての施設の建設を実現させてしまった。そして今、彼は身寄りがなく回復する見込みのない病気を抱えた21人を、同じ敷地内で寝食を共にしながら支えている。建設費用は銀行からの借金1億円。なぜホームレスを助けるのか？ この不景気に、いったいどうやって資金を調達したのか？ 疑問は尽きない。開設から1年余。「きぼうのいえ」の施設長、山本雅基さん（39歳）に話を聞いた。

暖冷房完備 個室、手作りの食事

地下鉄日比谷線の南千住駅から5分、日雇い労働者の街、山谷のドヤ街を歩いていくと、突如として場違いとも言える瀟洒なレンガ作りのビルが目に飛び込んできた。ここが、山本さんが施設長を務めるホームレスのためのホスピス「きぼうのいえ」だ。鉄骨レンガ造りの4階建て。内装には木をふんだんに使い、壁紙は暖かみのあるオレンジ色、入居者の部屋は完全個室で各部屋のドアには、きちんと木の表札が掲げられている。車椅子でも生活できる5畳弱のスペースには、電動式介護用ベッド、洗面台、冷蔵庫、ビデオ付きテレビが1人1台。各階に食堂や談話室があり、談話室には応接セットと電子ピアノまである。施設というよりはホテルに近い。3度の食事は入居者の好みに合わせて、ここで調理される。入居者は必要に応じて病院に通院し、往診してくれる医師もいる。命をまっとうするまで安心して住むことのできる家、それが、きぼうのいえである。がん、脳梗塞、糖尿病、パーキンソン病などさまざまな病気で末期状態になってしまった身寄りのない21人がここで暮らす。

「海外の施設も見て回って、僕なりにインテリアにもこだわったんです。ここはそれぞれの部屋が入居者のわが家ですから、許可なしにスタッフが勝手に部屋に入ることはありません」

朝6時半、食事の準備が始まり、8時を回ると入居者の部屋をひとりずつ回って声を掛ける。動ける人は食堂で食事を摂る。シーツ交換、掃除、洗濯、外来通院が必要な人を病院に連れて行く仕事、往診してくれるドクターの診察の立ち会い、役所との対応、事務仕事などなど、やることは限りなくある。同じ敷地内にある自宅にいても、ナースコールで起こされれば飛んでいく。1日があっという間に終わる毎日だ。

昨年には、初めてのお葬式を出した。肝臓がんの末期状態で入居していた67歳の男性だ。納骨を待つだけの遺骨がスタッフの集まる部屋に安置されていた。きぼうのいえで亡くなった人たちのための墓地も購入してあるという。

「どうしてホームレスなんて助けるの？」

「どうしてホームレスなんて助けるの？自業自得じゃない」。ホームレスのためのホスピスと聞いて、凡人ならまずこんな疑問が口をついて出てくるのではないだろうか。山本さん自身、何度となくこうした疑問を投げ掛けられた。

「自業自得と言われればそうかもしれません。でも、彼らは修羅場を経験して苦しんできたのかもしれない。雨露しのげる温か

い環境でなら、彼らももう一度人生をゆっくり考えることができるのではないかと思うのです。僕は過去は問いません。人を裁くのは裁判官の仕事。僕がやっているのは人を裁くのではなく赦していく仕事ともいえるでしょう。『あまりにも人間が罪を犯すから赦すのが忙しくて神には寝る暇がない』という寓話があります。どんな人も、祝福されてこの世に生まれてきたはずです。大切に育てなければ人は死ぬんですから、今生きているというだけで、いとおしい存在なのです。その大切な命に、どこまでも寄り添ってまっとうできるよう手伝うのが僕たちの仕事です」

山本さんは、きぼうのいえの施設長であるとともに、カトリックの宗教科教職資格を持つ。「クリスチャンだから、こんなことができるのね」と簡単に片付けてしまう前に、山本さんがなぜこんな心境に至ったのか、その生い立ちから探ってみたい。

惜しみなく与え続けてくれた父

育った家庭にはキリスト教どころか宗教的な雰囲気はまったくなかった。エリートの上級警察官僚の父と専業主婦の母と姉のごく普通の4人家族。

「父は警察庁の宴会部長の異名をもっていたひょうきんな人。母は主婦ですが商才に長けていて、その間に生まれた僕は、なぜか哲学少年。『何を雅基は深刻に考えているんだ』なんて言われて、家の中では突然変異ともいえる存在でしたね」

父親の仕事の都合で転勤が多く、小学校で4回、中学校でも2回転校を繰り返したため、子どもながらに苦労は多かったという。

「環境の変化に適応できなくて、小学校時代から転校のために不安神経症、パニック障害で毎晩嘔吐を繰り返したり、幻覚を見ては『精神病院へ連れて行ってくれ』と親に頼んだりしたことが何度もありました。非常に苦しい少年時代でした。高校は中退です。その学校では体罰が日常的に行われていたんですが、僕は『体罰なんかで人は絶対に変わらない。先生の方針には納得できない』と宣言して学校をやめ、その後通信制の大学に進学しました」

厳しく思い詰める性格ゆえの苦しさは味わったものの、両親からは無条件に愛情を注がれて育ってきたという思いがある。

「僕はよく人から、『ご両親にめちゃくちゃ愛されて育ってきたでしょう?』と言われるんですが、本当に寛容な両親でした。大学時代はアルバイトもせずにボランティアばかりやっていました。すると父はこう言うんです。『おまえのやっていることはいいことだから続けなさい。おれは出世だけを目指してきた人間だ。金はおれが稼ぐ。おまえはバイトなどしないで、人のために尽くせ』と。『だれのおかげでメシが食えてるんだ』などと言われたことは一度もありません。大層高額なオーディオセットを買ってもらったりもしました。僕が、『お父さん、車は人を殺しますが音楽は人を殺しません。息子を音大にやったと思って、楽器のかわりにオーディオセットを買ってください』と言うと、父は『おまえは本当にいい趣味を持っているなあ』と言って何も言わずに買ってくれる。そんな父でした」

見方によっては甘いと映るかもしれない。しかし、父は山本さんの性格を見抜いたうえで経済的な援助をし続けてくれていた。

「雅基がそういう男だからあげるんだよ。このお金が決して無駄ではないことがわかるから」。父は息子を無条件に信頼し、息子はそれに十分に応えた。

原点となる2つの心象風景

きぼうのいえのような施設をつくる心意気は、すでに子どものころから育っていたようだ。山本さんは、幼少時代に経験した2つの原風景を忘れることがない。

「ひとつは姉が購読していた少女雑誌のストーリーです。小さな女の子が幼稚園に行く途中、公園のベンチにいつも座っていたおじいさんに毎日シュークリームを届けていました。ところがある日、少女が手渡したシュークリームがおじいさんの手のひらからポロリと落ちてしまう。おじいさんはベンチに腰掛けたまま、だれに看取られることもなく亡くなっていた……。この話を読んだのは小学校の低学年だったと思いますが、ものすごく心が痛みました」

もうひとつは初詣に出かけ、街角で偶然、

「1年でよくここまで来たよね」。ふたりは顔を見合わせて言うが、必要なときにはいつも不思議に助けが現れた

戦争で手足を失った傷痍軍人を見かけたときのこと。

「なくなった腕の先にフックのような金具がついていて、それで体を支えながらアコーディオンを奏でているのです。『同期の桜』を奏で、人々に小銭を乞うている姿を見たとき、なんでこういう人がいなければならないのか、とどうしようもない気持ちになりました。この思いが大人になっても消えなくて、今のような形になったのかもしれませんね」

「山谷が僕を呼んでいる」

キリスト教に出合ったのは、慶応大学の通信教育を受けているときのこと。

「ちょうどそのころ、日航機が群馬県の御巣鷹山に墜落したんです。そのニュースが毎日のようにテレビで報じられていて、恋人を失った男性が泣き崩れるシーンを見ました。その瞬間、僕はこれだと思ったんです。僕は地獄の底に突き落とされたような人とともに人生を送ろう、そう思ったんです。キリスト教の洗礼を受け、聖職者を志して上智大学の神学部に入り直しました」

国立がんセンター中央病院の小児病棟の子どもたちとその親を支えるボランティアを始めたのもこのころだった。

「全国各地から子どもを入院させるために上京してきたものの、付き添うお母さん方のための宿泊施設がないことを知って心底驚きました。わが子の命の明日をも知れない親御さんたちに、雨露しのげる場所を見つけてあげたい、と心から思いました。それで、ファミリーハウスを作る運動のなかにポンと飛び込んだのが28歳のころ。50～60代、定年退職後の人たちが多いなかで、若者は僕ひとりでした」

10年間にも及ぶ活動の結果、ファミリーハウス運動は全国へと広がり、1998（平成10）年度の補正予算で19億円もの予算が付いた。

「これで自分の出番は終わったと思いました。それに小児科の医師との間に10年間に渡る確執があったんです。ボランティアグループのなかでは何でも医者が偉いという雰囲気があって、何かをするたびに医者の顔色をうかがわなければならない。僕はそれが嫌でした。結局、その戦いに負けたんですね。ずいぶん落ち込みましたが、もうすでにそこは自分が離れても動いていく組織に成長していた。自分の役割は終わったんだと納得しました」

そんなある日、テレビのドキュメンタリー番組が山谷の実態をレポートしていたのを目にする。

「直感的にここ（山谷）が自分が呼ばれているところじゃないかって感じたんです。行き場のなくなった人に住まいを提供する自立支援センターはあるけれど、ホスピスはない。ボランティアでおにぎりを積んで山谷をパトロールして回ったことがあったんですが、そのとき、『オレ、末期がんなんだけど、もういいんだ』なんてつぶやく人にも会った。こういう人たちのホスピスをつくろうという思いが具体的に固まってきたのです」

建設中の「きぼうのいえ」の前で

住民の反対運動に遭う

当初は現在のきぼうのいえより、もっと

山谷のドヤ街の一角に立つ「きぼうのいえ」

美恵さんとの結婚式の日のスナップ
（東京・四谷の聖イグナチオ教会で）

ささやかな施設を考えていたという。信用金庫から300万円借金し、小さなホスピスづくりを目指して不動産業者を回った。ところが何百件回っても片っ端から断られる。

「住所不定、無職、身元保証人なし、全員が病気で、いつ救急車が来るかも知れないし、霊柩車も参ります……。入居者のこんな条件を伝えると、どこでも『冗談じゃない！』って言われました。ずいぶん傷つきましたよ。ホスピス、行き場のないホームレスのためのホスピスは、産業廃棄物処理場、ゴミ焼却場と同じように嫌悪施設に映るんですね。何とか物件を世話してくれる不動産屋さんがいても、住民の反対運動に遭いました。僕は人々の人道的配慮が働いて温かく迎えてくれると思ったんですが、それは甘かった。住民のエゴや偏見はぬぐいがたいものがありました」

強力なパートナーの出現

一方、山本さんにはこのころ運命的な出会いがあった。現在、きぼうのいえをともに支える伴侶、美恵さんとの出会いである。きっかけは、上智大学文学部哲学科のアルフォンス・デーケン教授（現名誉教授）が主宰する「生と死を考える会」の流れに連なる社会人講座だった。

「僕のほうは完全に一目ぼれでした。何か懐かしい人に出会ったような感じがして、3回目に会ったときにはプロポーズしてしまいました」

一方、美恵さんのほうも、20年間交際していたフィアンセを事故で亡くして2年目。

「もう一生結婚はしないと思っていたんですが、時がたつにつれて心細くなってしまって……。亡くなった彼に手を合わせて、『一直線に進んでいくような人、社会に適応できないくらい、まじめで純粋な人、そんな人と巡り合わせて』ってお願いしていたんです。そして、すぐに目の前に現れたのが彼でした。出会った瞬間に、まさにこの人だって直感しました」

「お嬢さんをください。決して不幸にはしません」。山本さんが挨拶に行くと、思いがけず美恵さんの両親は結婚に反対はしなかったという。

「父のほうは彼に一目ぼれしてしまったんです。『雅基くんの目を見たまえ。綺麗な目だ。彼のやろうとしていることはとても立派なことだよ。一緒に苦労しなさい』って言ってくれました。母のほうは心配していましたね。『とてもいい人だと思うし、いい結婚だと思うけれど、母親としては心配』って……。『食べていけるのか心配』と言うので、『私が養うから』と言いました」と美恵さん。

とはいえ、新しい人生のスタートというときに、失業保険の給付期間も切れてしまい、夫婦ともに無職、無収入の状態。結婚式の参列者みんながふたりの行く末を心配した。

1億円を個人で借金

そんな折、知り合いの不動産業者から山谷の土地を紹介される。結婚式を挙げたのは1月13日、山谷に足を運んだのはその2日後のことだった。

「妻とふたりで山谷に行き、すぐにこの土地が気に入りました。銀行からはお金は貸せないと言われましたが、綿密な事業計画書を持参して、きちんと返済計画を説明したんです。銀行を説得するために、分厚い資料を作りました。入居者はホームレスで収入はなくても生活保護費は支給されます。障害に応じて障害者手当ても給付される。そうしたお金のなかから食費や光熱費などを捻出して、1億1500万を15年で返済できる計算です」

なるほど生活保護費ならば、支払いが滞る心配はない。少ないながらも確実に支給されるお金をもとに、ムダなく運営していけば、利益こそ上がらなくても借金返済のメドは立つ。これほど手堅い計画はないとも考えられる。山本さんは「心の人」でありながら、同時に経営者としての才覚も持ち合わせていた。

「それと、2日前に結婚した妻の前年の源泉徴収があったおかげで、銀行がお金を貸してくれたんです。この施設の準備に自己資金分のお金もたくさんかかりました。2週間後に6000万円の支払いが迫ってき

全国から届いた支援物資

スタッフルームの一角に、亡くなった入居者のお骨と遺影がさりげなく安置されている

きぼうのいえのボランティアスタッフと。右端が山本さん

て、払えるメドがまったくなかったんです。それでも僕がのほほんとしていると、ある修道会が数千万円ポンと出してくれたり、何の手形もなしにお金を振り込んでくれる人が現れたりで、何とか支払いが終わっちゃったんです」と山本さん。そんな姿に妻の美恵さんはハラハラさせられ通しだ。

「『どうするの。あてはあるの？』って彼に聞くと、『神様の仕事なのだから、必ず神様が助けてくださる。大丈夫だ』と言うんです。でも実際、5千万円、3千万円というお金をポンと出してくださる方が現れたので、本当にびっくりしました」

ふたりの様子を見ていたら、応援しないではいられない、そんな気持ちにさせられたのだろう。

ボランティアに支えられて

そして、きぼうのいえになくてはならないのは、ボランティアスタッフの存在だ。20～50代を中心に現在20人もの人々が交代でやってくる。

「会社にいたころは部下が手抜きをしないかどうか疑いの目をもってチェックしなければならなかったけれど、ここでは全く逆。一番大変なトイレ介助が取り合いになってしまうんです。掃除ひとつ頼んでも、『ついでにここもやっておきました』って、お願いした以上のことを誠心誠意やってくださる」と美恵さんはうれしそうに話す。

週1度、東京郊外からやってくるボランティアのひとりは、「入居者の人たちに愛着が湧いてしまって、どうしてるか気になって仕方ないんです。毎週、顔を見るのを楽しみにしてくるんですよ」と、またうれしそう。

「きぼうのいえで働くことを喜びとしてくださる方々がいる。ボランティアの皆さんの力がなければ、ここまではできなかったでしょうね」と山本さん。

「1年でよくここまで来たよね」。ふたりが顔を見合わせる。きぼうのいえの収入では食べていくのがギリギリではあるけれど、21人の元ホームレスは、雨露しのげる温かいわが家で残された日々を静かに過ごしている。昨年開いたクリスマスパーティでは、「自分の人生でこんなにいいクリスマスは初めて」と涙を流す人もいたそうだ。

人生の修羅場を歩んできた人々がともに暮らすのである。それ相応の苦労もないわけではない。「例えば、入居者同士で排泄がスムーズにできない人に向かって『糞ったれジジイ』などと罵ったり、足を引っ張るようなことをする場面に出くわすことがあります。そんなとき、僕は厳しく叱ります。最初は穏やかで優しい神様のようでいようと思ったんですが、時としてきぼうのいえを外からも内からも取り締まる保安官のような気持ちで働いていることもあります。僕はきぼうのいえを普通の社会福祉施設にはしたくない。衣食住を提供するだけではなくて、入居者に自分の人生を見つめ直し、人生の意義が見つけられるような精神的・霊的な手助けをしていきたい」。

そのためにティータイムにはボランティアのみんなと「生きる意味」「赦し」など、さまざまなテーマについて、気持ちを分かち合う時間が取れるようにしている。だからといって、キリスト教の信者になるよう勧めることは一切しない。妻の美恵さんも洗礼を受けていない。信者の数を増やすことが宗教の目的ではないと山本さんは言い切る。真の寛容とは、このような態度をさすのだろう。

つい先日、山本さんは階段から落ちて鎖骨と肋骨を骨折してしまったそうだ。時折、胸を押さえて苦しそうな表情を見せていた。文字通り、体を張ってきぼうのいえの住民を守っている。

「彼を見ていると生き急いでいるように見えて怖くなるときがあります。少しくらい悪いことをしてもいいから、長生きしてほしい」と美恵さん。これが妻、そして「きぼうのいえ」の住民すべての願いではないだろうか。